

研究

魅せられて綴る藩文学（五）

藩学「四教室」と先哲

勝間田 三千夫

（会員 佐伯市中村北町二一九）

五、筑陰・佐伯藩に解褐

寛政六年（一七九四）春三月、松下西洋は佐伯藩主毛利高標侯の聘に應えて佐伯に至り、褐を解いて藩儒に登用された。西洋を改め筑陰と号した。時に三十一歳。

筑陰伝の記録に曰く

「この年、佐伯藩士穴見守兵衛惟昌を日田代官所に使して偶夷に会して談論相識る。惟昌公事終りて後、帰国上聞し詩文を公に奉る。公大いに喜び直々惟昌を再び日田に遣り、公の命を述ぶ。二月十二日惟昌と共に佐伯に来る……云々。

又曰く、乃ち阿南惟昌をして幣々厚くして、以て之

を聘せしむに至れば、即ち、城中に館せしめ、師資を以て之を侍し礼遇特に厚し、己にして教授に挿す。」と。

三月十日、家中学問師範を仰付けられ、筑陰は以後藩文学として、書を四教室に講ずることになった。

これを前項の淡窓懷旧記に合せ見ると、筑陰は別格の身分で藩儒に登用されている。

それは、侯が幼少にして江戸大内熊耳に師事していたとき、大叔父壺邸が水戸山野辺兵庫助義胤の養子になったことよって、佐伯藩の文学が衰退すると、憂える気持を、侯は師熊耳から聴いていた。侯は幼少ながら脳裡に臆して忘れず、常に藩学興隆を図る機運をみつめ、時移り、寛政の学制改革に倣って藩学四教室の学制・学則を制度化し、学校教育の基盤をつくりあげ、かつ教育の向上を図るためには、秀出した人材を挙用して教授陣を整えなければならなかった。

筑陰が佐伯藩の儒官に登用されるに至ったことは偶然であったか。

日田は天領で知られる幕府直轄地で、九州の政治・経済・商業等を統轄する中樞をなしていたことは言うまで

もないが、九州のすべての街道が日田に通じていただけに、学問に通じる道でもあつて、諸国の文人・墨客が往来する所であつた。西洋の日田五年の歳月の内に、早や碩学の入「九州に西洋あり」と名声は高められていた。このことが佐伯藩主で好学の高標侯に知られるところとなり、抜擢の登用になつたと思われる。

また、「筑陰伝」の曰くに同感して推考すれば、天明から寛政にかけて全国六十余州に文運は高まり、学問を旨として諸国に遊学する青衿たちが往来するようになつて、松下西洋の名声は、日本街道を上下する。こうした青衿たちによつて江戸地に聞こえ及んだ。西洋がかつて江戸遊学するとき、面識のある佐伯藩江戸邸の用人であつた梶西金左衛門が、この時藩に在つて名譽ある執政を司つていたことから察すれば、日田官府に使者を往来させるのは藩務であり、時に西洋の名声を聞き、梶西大夫は西洋の品性を上書され、改めて使者をたて、佐伯藩へ解褐いたらしめたものと思われる。

かくして、西洋は別格をもつて儒官となり、居宅を初め四教堂の隣長屋の空家に住まいした。家は約三間、畳の数は二十畳程で、僕に廣平一人、後寛政八九年頃か、

居宅を城南(現在の大手前)に移り住んだ。

筑陰は、藩学「四教堂」の祭酒(校長)に登り、其下に儒員四人、野村丈右衛門・山本七兵衛・古田節右衛門・岩崎九兵衛の冠をなした。

また、学校の学監は目付の職であり、この時古賀五郎左衛門であつた。当時学校に出入する書生は六、七十人であつたという。

寛政六年四月に定められた四教堂の学制についてみると、次のようである。

〔四教堂、講堂定式・定会日〕

論語 一、講 釈 七 自九鼓至八鼓 教授勤之

左傳 一、〃 四 自九鼓至八鼓 訓導勤之

国語 一、大会読 三・八 自九鼓至八鼓

助教二人主之訓導

史記 一、小会読 一六 自昏至四鼓 訓導一人主之

一、詩 会 二七 夜自昏至四鼓

訓導師二人主之句読師

一、文 会 十 自九鼓至七鼓

訓導師二人主之句読師

一、句 読 毎日 自五鼓至九鼓

句読師二人主之

講釈式

一、独看毎日 自五鼓至七鼓

講釈会読可休 自人授至句読師一人輪次出席

朔望五節 休日

一、試業 毎歳二月

二年大考

句読式

句読生五鼓到館順其到之先後取名刺掛席上乃坐句読師先到則拝師而後就坐句読師就席以名刺之序授之生対師而拝師答拝受句読畢復坐回復所受之章若遺忘輒問左右師先帰者拝師及左右進退周旋勿失礼儀就坐之間須閑読前日所受勿乱席勿雑話勿誼嘩

会読式

会読分爲二也一曰小一日大謂其年齒小大同学業淺深也其式以学短長及班爵父位各就所令之席主会二人就席拜衆答拜一人生句一二章而後衆発問坐中有說者答焉其当否主会断之若不当則主会弁論之畢又発問答之断之如初於主会之断有所不安則重問可也其問難答說勿咸失礼讓矣学業進者勉強無懈者宜進名刺之序小会読準之其学進雖年小乎可列大会読也

到館之初各以班爵相讓而假坐主事令日移坐而後移席干

読堂講師就席而拝衆答拝講畢師拜衆人拜而後各復始假

坐揖讓下館講問勿耳語勿欠伸勿便坐勿誤退坐若於講義

有不悉者則復假坐之後就局問師而後下館

試業式 別記

右所式禁宣戒慎焉学業進者及勉強之徒試業之後進席若夫超乘者必有不次之逆矣兇命日敬孫洛時敏厥修乃来譜朝夕曳勉修成德施己勿或懈怠者削名刺退宗廟至矣失礼之甚則有罰云爾

寛政六甲寅年四月初 (松下筑陰傳より)

以上の学制により坐作進退これに従わしめた。

また、筑陰は学問を講ずるに、始め「論国学弟子文」一篇を示し、四術の貴ぶべき四教堂の必要なる所以を述べ、書生をしてこれを則らしめ、(その節文略)この一篇を以て筑陰の学風をなし、これが四教堂の文学の淵源を爲している。

筑陰は、藩儒として藩主及び士大夫のために月並講釈を行い、四教堂に書生を教導した。その師道は厳しく、

教法は極めて精細丁寧であつたといわれ、これより学風は大いに振張し、藩学興隆の氣運が開かれた。

かくして、筑陰は臣籍に登り、佐伯を終生の地と定め、松下氏の別系をなした。これが今日佐伯に在る松下家の起となった。

松下氏系図にみると、

源 夷 松下左衛門

始高弘 字世民 号筑陰

明和元年申年八月二十四日筑後国御井郡久留

米_二誕生

父者松下源助高景世々有馬家爲臣夷者第三男

寛政六甲寅年豊後国海部郡佐伯藩主八世毛利

伊勢守藤原高標侯_三仕給人格被仰_付

享和元年辛酉年參府供

享和二年壬戌年四月二十八日書物奉行九世藤原

高明侯御代

恩賜琵琶記_并詩(略・筑陰傳記参照)

室(妻)ハ左衛。宝曆十三年久留米ニ誕生、某

氏之女

筑陰は、この年、室に左衛を迎えている。

寛政七年四月、淡窓は日田に唯一の師であつた法蘭上人を失い(死去)、先師であつた筑陰の人となり、学問を慕い、日田を去ること三十七里の道程を八日間かけて佐伯に遠遊した。城中にある松下筑陰宅に着いたとき、先生ご夫妻が歓迎してくれた。と記されている。(淡窓日記)

時に筑陰三十一歳、室・左衛三十二歳、思えば、筑陰が佐伯侯に招聘され、ふたたび日田に帰り、久留米の方に問い合せた時があつたが、それは左衛への伝達であつたかもしれない。

六、筑後の光と陰

(一) 筑陰と淡窓

筑陰(当時西洋)と淡窓(求馬)の出合いは、寛政三年春の頃でした。求馬十歳の時、学を好み日田魚町にあつて日々四極先生の家に往来して、蒙求、漢書文選を読んで、質疑があればこれに答え、先生の講釈なしの業を受けていた時であつた。

後、四極先生は、当地に松下西洋の来遊を知り、往き

て求馬を紹介されて師弟の礼を執られた。

これより、求馬は西洋先生に詩作・文・訳文を学ぶことになり、また、四極先生の紹介で竹田村廣圓寺法欄上人に文学の業を時として受けることになった。が、月日の流れに追い追ひ西洋先生の宅に往来するようになっていった。

寛政六年春、松下西洋先生は佐伯侯の聘に応じて、藩儒として佐伯藩に赴れ、その後、同年九月十三日には法欄上人も牟せられ、求馬は師となる人を失つてしまった。このことを知った先考は、佐伯に往き、松下西洋先生に陪侍することを命じた。また、帰国後は他国に遊ばせることを意図するものであり、これは、先考の求馬に對する親心からであつたらう。幼弱にして、十二歳の頃には眼疾を患つたこともある求馬であつたが、しかし、西洋先生に師事して学問は既に青年期に達していたことを知らない先考ではなかつた。それだけに遠遊のその一步に佐伯行きを命じた。時に九月十三日、明けて寛政七年四月朔日を吉日を定めた。

この間、先考は命じたものの一抹の不安もあつてか、求馬遊学の事について松下筑陰先生に書を通して滞留中

の事を託した。

かくして、求馬は十四歳の春、僕・治助を伴つて、尊崇する松下筑陰先生に再会できる喜びを胸に、一路佐伯を目指した。道中往くこと八日にして佐伯に着いた。が、筑陰先生に拝顔を許されたのは翌九日でした。

求馬はこの道中の日々に紀行詩文五首を作り、佐伯滞留中に五首の詩文を作っている。その中には、佐伯城の詩や、遊船納涼の詩、四教堂に遊ぶ詩がある。また、初めての船遊びで上浦の瀑布を見聞されている。

四教堂に学び、余暇には散策して見聞を広められたことは、若干十四歳の少年・求馬の脳裡に強く焼き付き、遠遊第一歩の佐伯行きは、求馬の歩むこれからの人生に大きく期待が寄せられた。

求馬は滞留中ただ心残りには、君侯（高標）に御目見できなかったことであると、それは、天明・寛政にかけて収集された万卷書籍の閲覧ができなかつたことである。

さて、求馬は八月に至つて帰国した。しかし、その後多病の身となつて他国に遊ぶ志は遂げられず、時は流れて寛政九年十六歳になったとき、左仲の紹介によつて亀井塾に入門され、亀井南冥先生に謁することができた。

左仲は亀井先生と相議して、求馬に名を簡・字廉郷と定めた。以来、求馬の字名廉郷として詩名家の詩文に用いられるようになった。

これより前、寛政八年の冬の頃、〃去る年の冬より伯父五十歳の賀宴に先立ち、発句集上木のこと起り、此にその発句集二巻を撰され、今年を以て上木せんと、その序を松下先生に請い求められた。〃と、そのことが「筑陰傳」に記載されている。これは「秋風庵と松下筑陰」の項の下りであると思われる。

さて、亀井塾に入門された求馬は、亀井父子の薫陶を受くること三年、寛政十一年十二月、病んで耐えられず大帰した。求馬曰く「素志五、六年彼ノ地ニ留マリ、其後遠遊ノ志有シニ、病魔ハコレヲ許サズ。」と、よつて求馬の遊学は、佐伯・筑前に留まり、一生涯に遠遊は遂に達せられなかつた。その後は、健康寿命を天に祈願することを日課として数年の月日を送つた。文化元年二十三歳の冬の頃、求馬は決然として教授の志を定め、改勵して専心日夜開塾の事に工夫を用いることになつた。文化二年三月十六日、求馬は豆田町長福寺学寮を借り受け、遂に開塾した。これが淡窓塾の始まりであつた。淡

窓曰く「講学ヲ以テ身ヲ立ツルコト此時ヨリ始ル。」とまた曰く「予二十四歳ニ至リテ、始メテ師弟ノ名アリ、然レドモ入門簿トイウモノハ設ケズ、去年桂林園ヲ開クニ及ンデ始メテ入門簿ヲ製ス、ソノ法、入門ノ人ヲシテ自カラソノ姓名ト、御里ト入門ノ月日トヲ書カシム。」と、淡窓塾は始め、成章舎、後桂林園に改めて十年、ここに「休道」の精神が生まれ、これが母体となつて咸宜園が確立されていつた。これより宜園の名声は日々に高まり、全国六十余国の青衿たちが笈を負つて、日田を指したことは誰もが知る所であるので割愛する。

かくして、淡窓は病魔と闘いながら子弟育英の業に専心し、自らも学問を極め、遂に「敬天」説を唱ふるに至り、この二字を以て諸生を教誨したと明言しているように、その生涯は「敬天」を中心思想とした一学説を貫いている。敬天説こそ淡窓の哲学であつたとみることができる。また、詩作に於ても優れ、殊に「休道の詩」の作風は、今日学者の間においても絶品作と高く評されている。

日田盆地に在つて、天下に轟く教聖・詩聖・博識は遠遊に適す、とは正しく淡窓のことである。天下の情勢

が座して手に取るように見えたという。

偉大なる広瀬淡窓、その陰にあつて常に添削の勞を惜しまなかつた師・松下筑陰こそ、偉大なる碩儒であつたといえるだろう。時代が人を育て、人が人を育くむ。

顧みれば、寛政三年筑陰(西洋)が日田に帷を垂れ、子弟を教授する時、その入門の第一号が淡窓であつた。時に十歳、淡窓は入門するにあつて父に曰く、

「窃に古昔の人物を觀るに、其名世に稱せらるるは、大都詩文を以て芳を千載に残すのみ、不朽の盛事は急がざらんや、且つ余之聞く文は道の興なり、今夫れ道を知つて文を学ばざれば、譬へば終夜幽室の中に求むることあるが如し、燭土にあらざれば何を以て見ん。冀くば幸に先覚松下君の如き者を得て之に師事せんにとはと、家大人太其の言を感じて一日携来つて弟子の礼を執る。」(筑陰傳より)

と、筑陰はこれを「送広公鳳帰日鷹序」に認めているが、さぞかし頷き異才の少年と感悦されたことであるう。

それから三年のち、淡窓は筑陰を慕つて佐伯に來訪し、四教堂の諸生として從學した。居ること四ヶ月余

り。日田に帰るとき、淡窓は師・筑陰に一語服膺の言を請うている。筑陰はこれに応えて「送広公鳳帰日鷹序」一篇に次の如く、

「広生の出づる天の佳瑞なり宜しく洪業を大成し、佳瑞をして一世に眩しからざるになるまで、家大人勉勵の意にして広生の志なり。予又何を置喙せん、独り惜らくは遊徒の日猶少く、広生未だ心に慊らず予亦其材を離さざらんや。」

と筑陰は嘆し、「至其瑞於麟鳳龜龍以鳴国朝之盛予亦冀万一於広生云爾。」と。(筑陰傳より)

淡窓は帰国後も常に書簡を以て往來し、師の教えを乞うていることが筑陰傳に認められているが、淡窓日記にもその足跡を見る事ができる。その一詩、

寄題 西洋先生梅祥書屋

幽香一夜襲窓櫺。驚見梅花發後庭。

報答天祥君努力。可無明德競芳馨。

広瀬簡再拝

淡窓が佐伯に筑陰を訪ね來たつたとき、筑陰は未だ城内の長屋住まいであつた。それから三年後の寛政八・九年頃、居宅を城南新道街に賜り、家堂の一室を筑陰の書

齋に「梅祥書屋」と称した。筑陰はこれら新居の状況までも、文に詩に認めて淡窓に知らせしめ、その復書がこの一詩と見ることが出来る。

しかし、家堂も幾なく寛政十年の未曾有の大火で、庭中のすべてもが焼亡してしまった。が、数日後に焦土中より一梅樹が生じ、数年にして条幹具に暢茂し、やがて花をつけ実を結ぶに至った。筑陰はその生命力の旺盛なさまを以て家運長久の祥となした。これが梅祥を称する所以であると、文化三年同地に家堂を再建し、庭梅連理の祥あり。"と言っている。よつて家堂は一つに、筑陰はこれをもつて家学となし、また人の道の教えとした。

「梅祥書屋」は筑陰の学説の淵源である。今日、松下家に在る「梅祥書屋」掛軸の一幅は、十一代藩主高泰侯の直筆であり、三世孫義弘の代、嘉永年の作かと思われる。ともあれ素晴らしい筆跡である。

筑陰三十四歳、淡窓十六歳、淡窓は既にして梅祥の学説を理解されていたものと思われ、先の詩はその表われではなからうか。これより、年とともに筑陰の学説は淡窓の学問に大きく影響していったものと思われ、正に連



理の契りなるか。

また、この年(文化三年)の秋、松下筑陰は国命により長崎に赴かれ、帰路には日田を通り、魚町の淡窓宅に一宿した。淡窓には佐伯に遊んだ時から十二年ぶりの相見であった。淡窓は弟子の小関亨以下数輩を率いて謁見し、一夜会席に積る話をされている。中でも淡窓は筑陰の国命の用務を聴いて次のように認めている。

筑陰曰く「先頃国命ニ依リテ東都ニ赴ケリ。公命アリテ我國ノ藏書ノ目錄ヲ奉ラシム。儒臣数輩、其事ニ周旋シテ月日ヲ費シ。始メテ成就シタリ凡ソ四千餘部ナリ、固ヨリ唐本ノミナリ、

僻書ニ至ツテハ其大意ヲ書目の側ニ註ス。是ヲ以テ大ニ力ヲ費セリ。書目ナリテ後、自身之ヲ齎シテ出府セリトゾ」と。

徳川二百七〇有余藩の中でも、寛政の文学三侯と言われた佐伯藩の八代藩主毛利高標侯の蔵書癖は天下に知られていたことは誰もが知るところとなっているが、高標侯は唯収集するのではなく、閲読吟味して珍書良本を求め、求めた書籍を尊重し、また管理保護には殊のほか尽力されていた、と。

しかし、享和元年（一八〇一）高標侯は四十七歳の生涯を江戸邸に薨去された。

九代高誠侯の御代となつてから、幕府は、佐伯藩に蔵書目録の提出を命じられている。幕府には如何なる意図があったのか。後年文政七年（一八二四）からの蔵書目録の再度提出、そして同十一年に蔵書を献上させた経緯から察すれば、既にこの時から献上の意図があったものと思われる。時は享和三年春、筑陰が書物奉行に任せられた翌年のことでした。

筑陰のこのたびの長崎行きは、筑陰が存命中最後の国命による使いではなかったかと思われる。（後述）

この時、淡窓二十五歳、日田魚町に在つて兼ねて桂林園に往来し、業を講じていた。

それから四年、文化七年八月二十四日、松下筑陰は疾をもつて、四十七歳の生涯を閉じた。

淡窓は曰う「予、十歳の時より教を受け、愛育の思いは浅からず。」と、また「松下先生は、実に宜園の始祖なり。」と、病魔が纏わる我が人生に、学問を以て我を生かす道と示唆し、子弟育英の業に専念する決意をもたせてくれたのも松下筑陰先生の生様に学ぶところが大きかった。それだけにこの永訣に淡窓の心は深く痛み、唯々哀惜の念に耐えなかった。

淡窓は後、三十四歳のとき、かつて佐伯に遊んだ有し日に思いを馳せ、筑陰先生を偲んで一詩を賦している。

懐旧一首

佐伯国南疆 曾遊四教堂
奇書傾二酉 仙訣聚千方
吹浪江豚黒 連空海鯧蒼
先師墳墓在 夢裏或焚香

かくして、淡窓は松下筑陰に師事して、その示訓に違

うことなく学を極められ、世に教聖・詩聖広瀬淡窓と、その名声は高く、今日も人々の心に脈々として生きつづけているが、その指導の中心的人物が碩師松下筑陰であつたことを知る人は残念ながら少ない。

これを機に、郷土の先哲として世に語りつがれることに期待する。

(二) 直臣松下筑陰

時の藩主高標侯は、幼少より学を好み、成長して経史百家の書を涉獵し、二十二歳のとき「聖人の書に教えずして殺す此れを虚と謂ふとあるに、我藩末だ府学の設けなし、是れ經典に於て闕くる所あるなり。」として、安永五年十二月、大いに旧来の学制を拡張して城内に在る大叔父毛利壺邸の旧宅を以て学舎とし、藩校「四教堂」を興した。後天明元年(一七八二)二十七歳になつて城中に佐伯文庫を創設し、聚蔵した内外の書籍は万巻に達した。経史の書は勿論、医学・經典・儒学に至るまで、あらゆる書籍が集められた。

また、高標侯は学を重んずるにとどまらず、武をも重んじ、経文緯武を以て教導した。かつて、侍臣に謂て曰

く「文武は国家の根本なり、根本ひとたび枯るれば枝葉従つて枯れん。豈に夫そ重んぜざるべけんや。然れども人各長ずる所あれば、其の長ぜざるを強いて之を学ばしむべからず。」として、学と武術を精熟せしめた。

松下筑陰は、かかる寛政年間に藩侯に聘せられたのであるが、藩侯は筑陰の人となりをも、また、学識を知らんがためか、侯が命名した井戸「唾泉」を以て題とし、問えば、筑陰直ちに筆を走らせて曰く「泌者泉題之唾非使飲者唾以戒多言禍」と、高標侯はこれに感じて、これより尊敬の念を深くしたという。また、「唾泉」の二大字は筑陰が銘刻されたといわれる。

これより、筑陰は藩儒にとどまらず、藩政にも力を尽された。殊に蔵書癖の侯には、崇文する筑陰はなくてはならない存在にあつた。筑陰は藩務に厳しく、人には優しく慕われ、己に厳しく驕誇することなく、正に直臣の人物であつた。支那より来船の書を購入するときなど、侯は筑陰と談り、常に筑陰を長崎に遣るなどして、蔵書聚積を図り、天下に知られるに至らせしめた。

筑陰、城中に居住すること三年、のち居を城南新道に賜つた。しかし、寛政十年正月二十九日未曾有の火災

に、家はもとより蔵書は烏有に帰し、著書の詩文集若干をも焼失し、僅かに数巻を残すのみになった。これを知った侯は、その焼失した書籍のうち主なる書籍の若干を補填した。このこと、筑陰の「跋詩經通解後」一篇を一見すれば、侯と筑陰との関係の深さ、また侯の温厚な人となりを知ることが出来る。

享和元年（一八〇一）、筑陰三十七歳、この年春三月、高標侯に扈駕して江戸に赴いたのであるが、高標侯は八月七日藩邸に病んでその生涯を閉じた。時に四十七歳、筑陰は侯に仕えること寛政六年より此年まで七年、侯の死に接した筑陰の心中は如何許りか察するにあまりある。曾て厚遇を受け、慈和の心に触れられた筑陰は、侯の人物について「寛龍公行状一篇」を認めている。（略・傳記参照）

また、次に示す筑陰の高標侯の行状についての遺稿中には、先ず好学の人であったことが特筆され、次いで文武奨励を挙げ、高標一代の事蹟を大略として書き遺した。これが読みくだかれてか本傳記中の「十七、郷土の偉人毛利寛龍」の一節に散見される。

いま、ここに原文を示すと、

公幼好文学 先在東都日 招碩儒令之講習
經史ビシ黽勉惟日不足 公天才瞻富博聞強記 其学極
該博 所看之書一過目 則終身不忽 他雖奇玩之
具 亦如此 又好聚書 勿論經籍史策 自医卜識
緯 以至道典仏乘 凡海内之書悉收藏之 聞有奇
書 則不遠千里之道 使人請之 如不得請必令騰
写蓄之 是以其富不啻五車 張華杜兼之徒 不可
同日而論焉 然其所蓄藏 特不為己 自侍臣群僚
及他方儒仏徒 有請之者 則必假貸而弘其見 未
嘗見鄙吝之色 顧憂 請者少焉 公好文学性固然
也
亦敢不廢武備 使国家子弟日講武技 或以農隙蒐
獵山野 以觀武備 其言曰文武也者国家根本也
根本一技枝葉從枯 豈可偏廢乎 若夫備則国家不
得永安 為国者不可不知也 導国家子弟各從其性
文則以書冊 武則以兵機 數賞賜以誘其業 其尽
心於国家如此是為事蹟大略也。云々
なお、筑陰は悽愴の念に耐えず、哭詩一篇を賦してい

寛龍公に贈る詩一篇

仙鶴高飛不復還 山城秋色自凄然

可憐悲泣群臣淚 恰似鼎湖鑿醫年

儒臣 松夷世民敬誌

かくして、高標侯なきあとは、没年月日を以て九代高誠(高明)侯が藩主となった。翌年の享和二年(一八〇二)四月二十八日、筑陰は書物奉行に昇任された。時に三十八歳、先侯七年間の忠君愛国の賜であったか、ともあれ異例の抜擢であった。

明けて享和三年、筑陰は書物奉行として初めて大事に直面した。それは佐伯藩が所有する蔵書目録を提出せよという幕府の命であった。

時の將軍家齊公は、天明七年に就任され、恰も松平定信が老中になって寛政の改革を始めた時にあたり、前節に述べたように、その改革によって官学は朱子学を中心とされたため、諸藩もその影響を受け、藩校のすすむべき道を左右選択された藩も少なくなかった。

この松平定信は有識故実に通じ、多くの著作を遺している人で、殊に外様大名の小藩の中でも、柳の間詰の三侯(毛利高標・池田定常・市橋長昭)との交わりは深かった。それは学問を通して知るところであり、中でも佐伯

藩の蔵書の内「玉海」なる中国の書籍百冊はことの外注目され、羨望されていた事から察すれば、この時期から諸藩の蔵書調査は始められていたのではないかと思われる。

此度の佐伯藩の蔵書目録の提出は、藩主交代に伴うものであった。先侯高標がことの外書籍を大切に管理されていることを知り尽している幕府だけに次世の藩主の保護管理が充分に果されるか否か、将又、幕府と諸藩の主従関係から、いざれ献書させる意図が含みとして残され、ために蔵書の動静等管理を強化する目的があったのではないか。ともあれ、筑陰は享和三年、幕府の命を受け、藩命を以て東都に赴かれた。提出した目録の内、唐本のみ凡そ四千部と筑陰は言っている。

さて、筑陰は幕府に蔵書目録の提出を終えて城下に諸国の文化を求めて散策し、一琵琶を購い求めた。筑陰は学のほか楽をも能くする人で、風月の詩家の一面をもっているだけに最高の購い物であった。ところがその琵琶には、不図も次のように明記されていたと、その銘に曰く「慶長庚戌夏四月山室永夢応森伊勢守」と、この銘に思うに、年号は慶長十五年四月、琵琶師山室永夢が森

伊勢守に依じて作製された琵琶であろうか、また、森伊勢守とは、毛利伊勢守高政のことで佐伯藩初代藩主となった大名に相違ないが、何故、毛利とせず森としたのか。それは末代家宝として伝えるため本姓森と刻銘したのであろう。

慶長十五年四月は高政参勤交代の時にあたり、この年將軍秀忠の命により、高政は十九諸侯と共に名古屋城の造営に助役を命ぜられている。この琵琶は幾年藩士の士氣を高めんと奏でられたであろうが、この度、偶然の入手とはいえ、毛利氏の歴史を物語る藩の宝物である。ために高誠侯は一琵琶を京師に得て筑陰に授けた。筑陰はこの事を伝記の中に「示後昆」と結び、また以て一詩を賦している。(詳伝記参照)

しかし、筑陰七世孫の松下哲氏は言う。「惜むらくは、我家に今琵琶を蔵せず。若しその所在果して何処にや。」と、所在が明らかであれば是非もなく求めたい心境であったことが伺える。

文化三年(一八〇六)前記のとおり、筑陰は藩命を奉り長崎に遣いして、途中故郷を訪ねることが叶った。筑陰はこれまでも幾度か長崎に赴き、その都度故郷の山河を

望み父母や妻子の安否を気遣いながらも、唯々祈る気持ちで往来していた。思えば、一別以来十七年、齡四十三歳の秋に至って願の筋により帰国が許され、故郷を訪ねて実子元謙に会し、故人の墓前に合掌した。

筑陰がここに至るまで、何故恩郷の念に堪えなくてはならなかったか。それは米藩の掟に反したことによるもので、それがこの度、帰国が許されるに至ったには実子元謙の父への思いが通じたからである。

つまり、筑陰が国を出でてのち、一子元謙が寛政十二年(一八〇〇)二月に跡目相続して、若干にして異例の抜擢で一五〇石御医師並を仰せつかったことによるもので、文化二年、元謙(寿庵)の願い叶って父筑陰の帰国が許されることになり、久留米と豊後佐伯の出入りが始まった。

父子の絆の深さが功なし、筑陰は足掛け二〇年にして郷国の土を踏みしめることができたが、筑陰の心中はいかばかりであったか。

では、筑陰が出郷の作とも思われ、望郷の念に堪えずして賦した一詩。

一 出家郷猶未還。南天遙望錦屏山。

雲中黛色如相笑。彷彿多年夢寢間。

次に、二十年ぶりの再会で、一子元謙また旧友との思

いが伝わる詩を紹介する。(伝記より)

同逢児章

記爾後提辰。倉皇別水濱。

相逢且相恠。非復夢中人。

米府会舊友

一別東西南北人。還鄉白訝夢相親

箕山筑水如相許。車使秋光滿葛中。

同訪諸子見訪

何国廿歳一帰家。且喜親交情更加。

彩筆從稿才不盡。赤城非復旧時霞。

贈同樞世儀

二十年前辭故林。相逢共駭髮毛侵。

欲知別後思君意。筑水滔々深万尋。

同過季礼幽竹舍有感

鳳坐籠笛好誰聽。相位相和是此亭。

戶外清陰舊題竹。應□客髮已星々。

また、元謙の詩に季礼が和韻した詩を紹介する。
将発米城児章有诗情実溢言外余

不堪悲嘆聊賦一首

減情故園何杳渺。不但隔山川握手。

初疑夢留啼又問。年有人勤勉境無。

德掩□愆唯識生。離若綿々在此筵。

積年の思い叶い、南天に遮ざる雲ひとつない故郷をあ
とに、一路日田へと歩を重ねる筑陰であった。日田に淡
窓の款待を受け、一夜を明かして帰藩した筑陰、それが



ら四年後、筑陰は病んで梅祥書屋に四十七歳の生涯を閉じた。遠行、文化七庚午八月二十四日。

筑陰の生涯には三つの偶然があった。

一つは、東都に得た一琵琶が初代藩主と九代藩主を引き合せたこと。

二つは、筑陰の誕生日と歿年の月日が同じ八月二十四日であったこと。

三つは、八代藩主高標侯と筑陰の歿年齢が同じ四十七歳であったこと。

筑陰は、佐伯藩主八代高標、九代高誠侯の二代に仕えること十七年、学問の必要性を説く高標侯に仕え、その右腕となって佐伯藩文教の中心人物となった筑陰の足蹟は、後の文化・文政へと末広がりには開花をもたらし、佐伯藩学の師祖にして、偉大なる漢学者・教育者として高く評価されなくてはならない。

筑陰は毛利家菩提寺龍鼎山に葬られ、墓碑には「世民篤修居士」と刻名されている。子々孫々に至る今日も常日清心にして偲ばれている。なお、筑陰先生の墓誌は銘されていないが、嘉永五年、後学の佐伯藩儒官楠文蔚の手によって、筑陰の遺徳を称え、子孫に伝えて謹撰され

た「松下先生墓誌」が残されている。また、筑陰の遺髪は久留米市京町の梅林寺にも埋葬されているという。

終りに、筑陰逝きて一九〇年。生誕二二七年に当たる平成十三年の今日、いつかは接してみたかった筑陰文学の歴史、機会を得て松下家に七世孫松下哲氏の著書「松下筑陰傳」に接することができ、その著書を基に、他の文献等で補足し、歴史的に記述してみた。

今、松下筑陰先生を偲ぶ時、その偉業に感銘し、人の一生を「異国の地に堪えてはな咲かず筑後の陰英^{かげはな}」の言葉でおさめたい。

なお、この「松下筑陰傳」を著された松下哲氏の学才は筑陰を彷彿とさせる人物であつたらうと察せられる。この著作に使用された数多の書簡等の資料は、傳記大成の後、惜しむべく、今日僅かな文書が不滅の筑陰文学として香り高く生きつづけている。

〔その他の参考文献〕

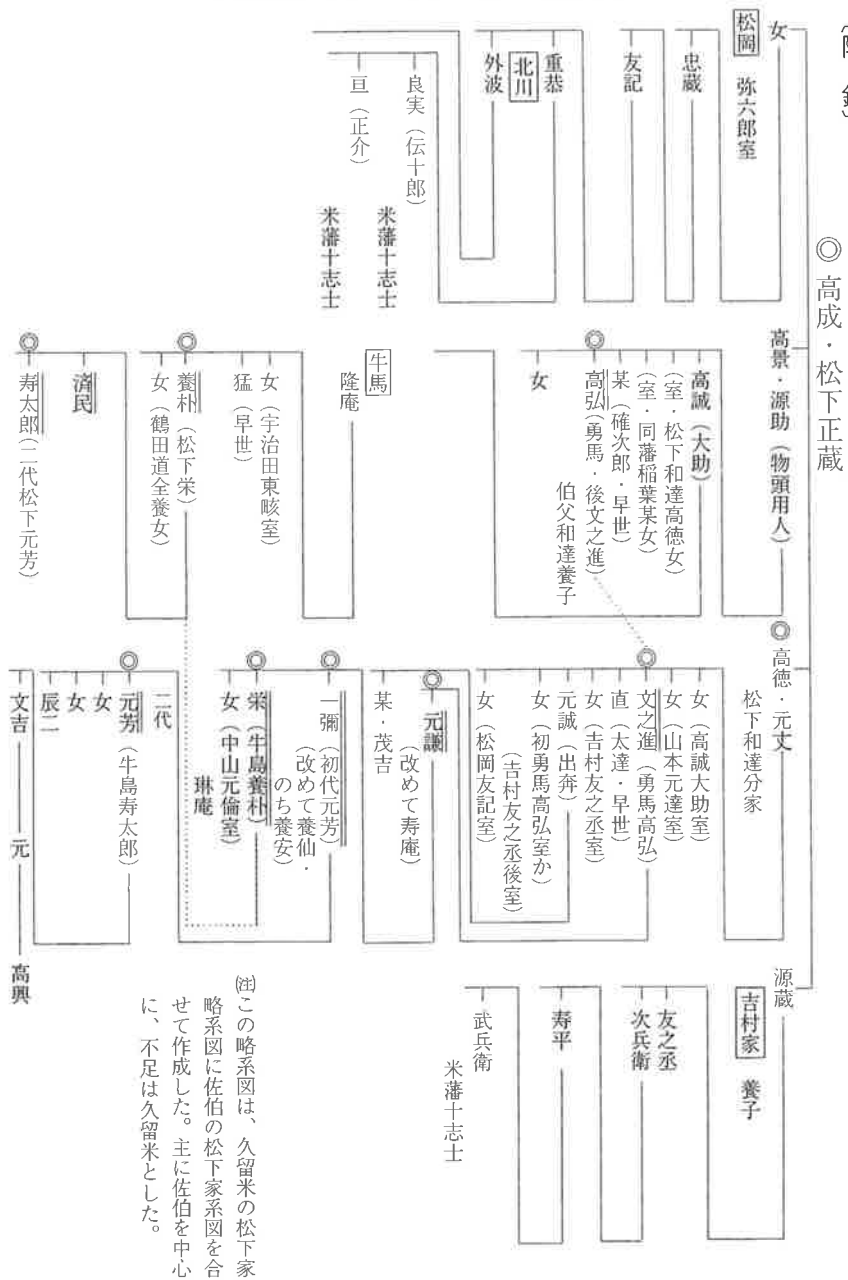
広瀬淡窓全集（全三冊）

久留米人物誌 篠原正一著

日本史総覧 新人物往来社

（次回より中島米華）

久留米藩 松下家略系図



(注)この略系図は、久留米の松下家略系図に佐伯の松下家系図を合せて作成した。主に佐伯を中心に、不足は久留米とした。